勝浦： なると。なるほどね、よくわかりました。

それではですね、さっきのことと関係があるんですけども、父親のあり方ということで、「今風の友達の父、威厳のある父親、どっちがよろしいでしょうか？」ってご質問なんですが。「自分の父親は厳格ですが、今の私は子どもに甘く接しています。普段仕事が忙しくなかなか会う時間がないため、このまま甘い父親でよいのでしょうか？よく子どもは思春期に父親を嫌うと聞きますが、どのように接していけば嫌われずにいけますか？」

これ、すごい切実なんですよね。ある先生が最近お嬢さんからすごく嫌がられると言うんですよ。年齢を聞いたら当然なんですが、父親としてはとてもショックを受けていました。何か坂本さんの方からありますか。

坂本： うちも結構、思春期を実感させられました。父親、母親の両方いたら、どちらかがやっぱり子どもと話せる関係をつくっておくのが大事で、それが母親の場合もあれば父親の場合もあるし、ご家庭によっていろいろだと思います。ひとり親の場合は、おじいちゃん、おばあちゃんだったり、あと学校の先生っていうこともあるかもしれませんよね。周りの大人たちが誰かその子に対してチャネルをもっておくことが大事。その人を経由して親子がつながるという時期も育て上げるまでにはあります。

対面で子どもと向き合うだけが親子関係じゃない。思春期なんか特に、小さいときの話を持ち出されると妙に子どもが反発する場面もあります。一番荒れる、思春期あたりを乗り越える上では、テクニカルな話かもしれませんけども、ちょっと斜めの関係だったりする大人がいるってことがとても重要。親には話せない素直な思いをおじさんに話したり、おじいちゃん、おばあちゃんに話したり、近所のお兄さんに話したり、いとこに話したり。思春期には、子どもがどれだけ自分を出せる人を外にもっておけるかも、ちょっと考えていかないといけない。

NPO法人 新座子育てネットワーク代表理事 坂本純子氏

勝浦： 私のところの子どもはもう大きいのですが、一生親と仲良くするなんて、無理だと私は思います。気持ち悪いですよ、ずっと仲良いなんて。ごめんなさい金子さん、ショックなこと言って。

金子： まぁそれはいろいろな家庭があるんで、うちは多分大丈夫だと思います。

勝浦： そうですけど、時期があるんです。もちろん心の底では愛してるんだけど、やっぱりうざったいって思うときがあるじゃないですか。心の底では否定はしてないけど、「うっせーな」って思うときはくるわけですよ。それは反抗期ですから、来た方がいいんですよ。反抗期がなくて、何かの価値観を壊さないまま大人になるということは、それはそれで発達上問題なので、やっぱり親子関係はずっと蜜月じゃないんですよ。

藤森： 僕は思うんですけど、うちも双子の娘で今6歳ですけど、まぁあと3、4年でお父さん嫌いみたいになると思うんですよ。子育ては期間限定なんですよね。だからこそ今しっかり関わっておきたいんですよ。

坂本： 乳幼児期って子どもはやっぱり無欲で、パパとママの親の愛を求めてきます。そのときにしっかり向き合うと、「愛情の貯金」って私たち言うんですけど、いっぱい貯金ができるんですね。で、子どもが成長して自分の世界やお友達との世界、思春期なんかになってくると社会と自分との関係を考えて、もやもやってしたりします。そんなとき、小さい時期に貯金をしていた共通の思い出が子どもの側にも親の側にもあると、親が上手に向きあえない時期を乗り越えていくための共通の財産になるんですね。「あれだけ小さい頃一緒にいたのだから」とか、「あんなに頑張ったんだから」と、関係を修復するよりどころになる。そういう意味では小さいときに、なるべく関わるのはとても効率的で、共通の思い出が親との間に絆として残るんですね。

勝浦： 大変な時期が来る前に人間関係の貯金ですね。

坂本： そうですね。今離れてても、また元に戻れるという思いを両方がもっていられるのはとても大切。でもそれは、時間だけじゃないし、やっぱり距離でもなかったりするんです。離れていても上手にその関係を結び合うことは、できると思います。さっき金子さんおっしゃった、テレビ電話、携帯電話で話すとかね、そういったことを使っているおうちもあるし。それともうひとつは、いないお父さんをいるように見せるお母さんのテクニックです。「お父さん、今何してるかね」とかね、「あっ、これおいしそう。お父さんも一緒に食べたいよね」とか、生活の中でお父さんの影をいっぱい見せていると、子どもはお父さんと離れていて今目の前にはいないんだけど、「お父さん喜ぶよね」と存在を想像の中で認識させるんです。これは大人のマジックですね。

勝浦： 「昔に比べ子育てに父親が参加するようになり、母親は楽になっているはずなのに、あまり楽に感じないのはなぜでしょうか？」というご質問です。「10ヶ月の男の子のママです。毎日ほっと落ち着く時間があまりないんです」そうなんですよね。それから「よその子との関わり方。価値観が多様化している現在においてどう付き合ったらよいか？」それから、「パパになりきれない男性。いつまでも独身気分。どうやって変わっていくのか、変わるのか？」というこの3つのご質問、その中の何かおひとつでも。

田中： 昔に比べて、子育てに父親が参加するようになったのかもしれないけど、逆に地域住民との関わりが薄くなっている。いわゆる核家族が増えると、自分、お父さんお母さんにとっての親、つまりおじいちゃんおばあちゃんのサポートをなかなか受けられない。一人の子どもに対して関わる大人の数も、やっぱり減ってきているのかなと思います。

勝浦： そうそう、だから楽になってないんですよね。昔は地域とか家とかで子どもを育てていた。なにか悪いことしても、見ててくれるし、叱ってくれる大人が周りにいた。いまは、すぐ教育委員会なんですよね。地域の教育力がなくて、すぐに学校や教育委員会に言うってことで、みんなで子どもを見ていくっていくことがなくなったんですよね。

藤森： だから、親同士のつながりもない方が多いんじゃないかなって思うんですよね。さっきもちょっと楽屋で話したんですけど、僕の子どもが小学校3年のとき同級生からいじめに近いことをされたことがありました。でも、相手の子どものことを僕は知ってましたし、その子の親のことも知ってたので、学校に言うんじゃなくて、まずその子の親に話をしたんですよね。そしたら最近、家庭内で何かあったようで、じゃあ家族で話してみたらっていうことで、結局それは解決しました。子ども同士もそうだけど、親同士、親とその地域の子どもがつながるのは大事なんですよね。

勝浦： 私もうちの子どもと他の子が保育園でもめて、ちょっといじめみたいになったときに、その子の親と私とその子とうちの子と4人で話しました。私たちが話して出した結論は、私は自分の子を信じて、あなたはあなたの子を信じていくしかないよねって。それを子どもたちが聞いてて、それでOKでした。そういう人間関係ですよね。段々人間関係が希薄になっていて、事なかれ主義になっていることが問題だと思います。

パパになりきれない男性がいますが、みなさんはいつからパパ気分になったのでしょう。パパになった日。例えば奥様が妊娠中からという方もいらっしゃるでしょうし、もっと遅いっていう方もいらっしゃるでしょうし。自分はこうやってパパになった、だから夫をパパにしたい場合はこれもきくよっていうような、そんな話を伺いたいと思います。

田中： そういう意味で言うと、私の場合には出産に立ち会って出産を目撃したこと。そして、出産した後っていうのは母親が体調回復に専念しますので、自分がまがりなりにもオムツを替えたりする、そこがやっぱりスタートだったのかと思います。正直、妻が妊娠しているとき、妻の方は自分の体の中に新しい生命が宿ったわけなので、母親というか母性が芽生えたかなと思ったんですけど、自分は父親になることを直前になっても実感できなくて、いいのかななんて思っていたくらいだった。実際には、生まれてきてからです。

藤森： 私は、最初のエコーでした。皆さんも見られたりするでしょ、奥さんが検診に行って、妊娠して、エコーの写真を見せられて、この豆粒みたいな子どもを見たときからですかね。そのときから、あっ僕なんかちょっとパパスイッチが入った。僕も立会い出産したんですけど、すごい大変な思いして奥さん産むんで、またさらにスイッチが入った。スイッチ入りっぱなし。

金子： 僕も、できたっていわれてエコー見たときに、父親になるんだって思って、実感じゃないんですけど、たぶんそこから父親になる準備をしてたんですよね。出産して生まれて、ああ、父親になったんだって感じたかもしれないですね。ただ、本当に今僕が、こう父としてちゃんとできてるかっていうと、僕は一生わからないと思うんですよね。正解もないと思うので、その人なりの今までの中にある価値観があるわけですから、その中のバランスを奥さんと話し合って決めていくしかないんじゃないのかな。

金子貴俊 氏

勝浦： じゃあ坂本さん、いかがですか。ご自分の母親スイッチと、ご主人の父親スイッチ。

坂本： いまね、みなさんがおっしゃったように、母親ってフィジカルな、体の変化があるのでわかりやすいし、産むときに衝撃的な痛みとかあるわけなんですけど。もう生死をかけるみたいなね。もうほんとに人生の中で最大のイベントとして体が受け止めるってところがあるので、割と入りやすいですよね。

やっぱり、お父さんっていうのは、頭から入って、妻の変化をリアリティをもって感じる。そういう意味では立会い出産を勧められるのは、そのすごく苦労している妻を見ることによって、イベントに参加をしているということができるからなんです。

生まれてからは、やっぱり子どもと関わるということで、段々と父親になっていくんだと思うんですよね。今のご質問の、いつまでも独身気分っていうね、お父さんによってはやはり時間もなかったり、なかなかお母さんだけで手が足りてしまって出る隙がなかったりで、お父さんとしての自覚が遅れる人はやっぱり多いですよね。子どもがある程度、お父さんと遊べるようになってくると、遊び友達としての親子関係っていうのもひとつチャンスだと思う。もう少し大きくなってきて、お父さんと趣味を共有するとか、かつてはお母さんと子どものペアルックだったけど、お父さんと子どものペアルックみたいなものもいっぱいあって、ファッションを一緒に楽しむとか、教育できる材料がいろいろあると思うんですね。世話としてはなかなかできなくても、そういう一緒に生きていく楽しい家族の中のもう一人のメンバーということで、父親になっていくっていうチャンスがあるかと思います。

勝浦： 「一日2時間くらいしか世話ができません。お風呂に入る時間に、寝かせる時間をあわせて2時間程度」。2時間って結構長いですよね、十分長いです。「短くてもよいのでしょうか？」結構です。

坂本： 日本の平均33分ですから。

勝浦： そうですね。2時間の方は自信をもってください。結構な時間でございます。あとのご質問は、「夫婦で子育てや人生設計についてどんな風にお話をされていますか？特にお話とかはされていらっしゃいますか？」

金子： 最近だともうすぐやっぱり幼稚園とかなってくるんで、地域にある幼稚園に見学にいったりだとか、そういうのはやってますね。

田中： 私のところは、参考になるかわかりませんけど、子育てをする計画をそれなりに話したりしますが、その後子どもが独立したら自分たちはどうしたいかっていう話もしています。子育ても楽しいんですけど、子どもはいつか巣立っていくものなので、子どもが二十歳過ぎて独立したときに、自分たちはどうしたいのか、という話もしています。

藤森： うちはそんな余裕がなくて、3人育てるのに精一杯。でも子どもたちのいろんな言動とか、結構双子の6歳の女の子たちはリアルなままごとしたりするので、そういう会話を聞きながらですね、夫婦二人でニヤニヤしながら聞いたりしている。

勝浦： 「しつけとして子どもに伝わる叱り方は？」また、「何ヶ月くらいからはじめるのがよいか？」これは、別にお父さんにだけ聞くことでもないんですけど、何かこれについてご意見ありますか？

藤森： やったことについてはちゃんと叱ったほうがいいと思うんですよ。だけど、それは君が嫌いなわけではなくて、君のことは愛してるよと。でもこういうことしちゃいけないよねっていうのは、段々最近大きくなってきた上の小学校4年生の男の子とかにはしっかり伝えています。

田中： しつけは、うちもまだ2歳なので、「これダメだよ」っていってどこまでわかってるのかがこちら側もわからないですが、基本はメリハリ。できたらちゃんと褒めてあげて、やっちゃいけないことやったら叱る。

坂本： あと、幼児を持っているお母さんに多いんですが、その場で何かしたことを叱るのはいいのだけれど、1週間前やったことをまた引っ張り出して叱る。子どもの記憶の容量は3歳くらいだと犬並みっていいますよね。子どもの記憶って大人が思ってるほど長くないんですよ。だから、小学校低学年くらいまでは、今怒ったことを今教えてあげるっていうことが肝心ですよね。1週間、1ヶ月前のことを鮮明に思い出せるのはやっぱりかなり大きくならないと難しいというのがありますね。

勝浦： おっしゃるとおり。例えば外で悪いことして、外で叱れないからっていって、何時間かたってから叱る。それでは何を叱られてるかわからない。直後の強化っていいますけど、やった行為の直後に褒めたり、叱ったりってのが大事ですよね。

藤森： あと長く叱らないのが大事かと思います。長く叱ってると、子どもは叱ら